

水稻新品種「えみほころ」の特性

水稻育種担当 大岡直人

1 ねらい

埼玉県の米づくりは移植期間が4月下旬～7月上旬までと長いことが特徴となっており、安定した栽培をするには、中晩生熟期の品種が不可欠となるため現場から早期育成が求められていました。

そこで、中晩生熟期、「彩のきずな」以上の高温登熟性、「彩のきずな」並の良食味、イネ縞葉枯病抵抗性を目標に育成を行いました。

2 研究内容

(1) 育成経過

栃木県の育成品種「とちぎの星」を母親、「彩のかがやき/東北192号」の交配後代であるF₆世代の系統「さ906」を父親として、2012年に人工交配を行いました。2017年から「むさしの31号」の地方系統名で奨励品種決定調査に供試した結果、有望と判断されたことから、2022年3月に品種名「えみほころ」で品種登録出願を行い、同年7月に出願公表されました。

(2) 生育・収量（比較品種：「彩のかがやき」）

ア 出穂期および成熟期は「彩のきずな」、「彩のかがやき」の中間にあたります。

イ 稈長は、早植は同等、普通期はやや長く、穂長は同等、穂数は少なく、草型は中間型です。

ウ 耐倒伏性は同等で、現地試験の6月下旬植でなびく程度の倒伏が確認されましたが、所内試験では確認されていません。

エ 早植、普通期とも玄米収量は安定しており、同等に確保できます。

オ 玄米千粒重は重く、粒形は粒長がやや短く、粒幅はやや長く、粒厚は厚みがあります。

(3) 玄米品質・官能食味

ア 外観品質は、登熟期間が高温に経過した場合も白未熟粒の発生は少なく、「彩のかがやき」に比べ良好です。

イ 食味は、「彩のかがやき」、「彩のきずな」と同等の良食味です。

(4) 諸障害抵抗性

ア イネ縞葉枯病は「彩のきずな」、「彩のかがやき」と同じ抵抗性です。

イ 高温登熟性は「強～やや強」と「彩のきずな」より強い耐性を持ちます。

ウ 葉いもち「やや弱～弱」、穂いもち「中」、紋枯病「弱」のため、多発生が予想される場合は防除が必要です。

3 今後に向けて

2021年から所内にて適性施肥量や栽植密度などを把握するための栽培試験を開始しました。同時に現地実証ほを設置し、大規模栽培における生育特性の把握と評価を行い、普及に向けた準備を進めています。

表1 奨励品種決定調査結果(2019～2021年平均値)

栽培条件	品種系統名	出穂期 (月/日)	成熟期 (月/日)	倒伏 程度	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/m ²)	千粒重 (g)
早植	えみほころ	8/4	9/13	0.0	81	21.4	386	21.7
	彩のきずな	7/29	9/7	0.0	72	22.7	440	21.8
	彩のかがやき	8/9	9/23	0.0	81	21.2	416	19.8
普通期	えみほころ	8/20	10/3	0.0	82	21.8	317	21.8
	彩のきずな	8/16	9/27	0.0	71	22.1	411	22.6
	彩のかがやき	8/23	10/9	0.0	75	21.4	341	20.9

注)移植期は早植5月13～14日、普通期6月21日。施肥量(窒素成分.kg/10a)基肥5、中間肥2(彩のかがやきのみ)、穂肥3。倒伏程度は無:0～甚:5の6段階評価。

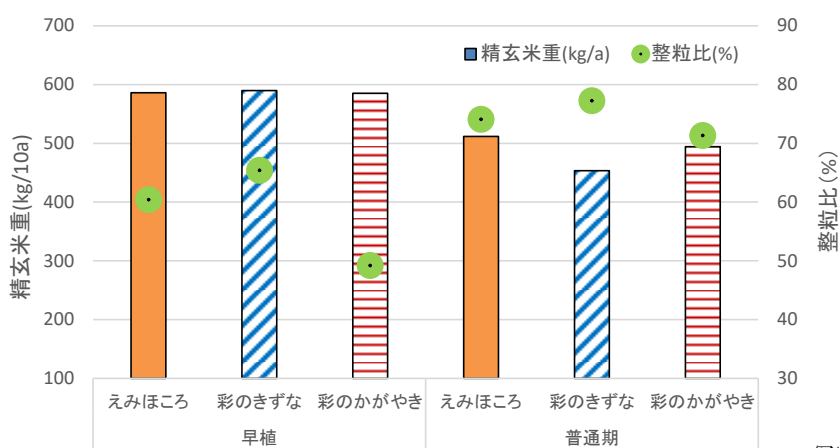


写真1 上: えみほころ、下: 彩のかがやき

図1 玄米の収量・品質 (2019～2021年平均値)

表2 官能食味検査結果

栽培条件	総合	外観	香り	味	粘り	硬さ	年産	基準品種
早植	-0.25	0.21	-0.58 *	-0.17	-0.46 *	0.25	2019	彩のきずな
普通期	-0.26	0.26	-0.53 *	-0.21	-0.42 *	0.53 *		
早植	0.00	-0.14	0.38 *	0.05	-0.10	-0.33	2020	彩のかがやき
普通期	0.08	0.56 *	-0.32	-0.08	0.36	0.00		

注)食味試験の方法は日本穀物検定協会の方法に準ずる。*は5%水準で有意差があることを示す。

表3 障害抵抗性

品種系統	イネ縞葉枯病 (遺伝子型)	葉 いもち	穂 いもち	白葉 枯病	紋枯 病	ツマグロ ヨコバイ	穂発 芽	耐倒 伏性	障害型 耐冷性	高温 登熟性
えみほころ	抵抗性 (<i>Stvb-i</i>)	やや弱 ～弱	中	やや弱	弱	感受性	難	強	やや弱	強～ やや強

注)イネ縞葉枯病は自然発病。葉いもちは福井県による結果。穂いもちは新潟県による結果。白葉枯病は剪葉接種法。紋枯病はもみ殻ふすま培地による結果。ツマグロヨコバイは選好性検定。穂発芽性はイネ育種マニュアルに準ずる方法。高温登熟性は自然条件。